

みのり2組 生活単元 実践事例

日時 2012年 1月 18日(水) 5校時

対象 4年生4名

場所 みのり2組の教室

授業者 稲名 智恵子

1. 単元名 琵琶湖一周を楽しもう！

2. めざす子どもの姿

(1) この単元で身につけさせたい言語の力

本単元では、共通の興味あることを基本に、おもしろくて楽しい活動を先生やともだちと一緒に活動する中で、言語の基礎になる伝えたい思いや共感する心地よさを積み重ねることで自己肯定感を高めさせたい。力いっぱい活動に取り組み、自分の思いや考えに気づいたり、掘り起こしたり、広げたりして、コミュニケーションの力を育てたい。明るい気持ちで課題に向かう気持ちや意欲を身に付けて欲しいと考えている。その力こそ、「強く豊かに生きる力」につながり、実際の生活において生かされると考えている。

本単元ではただおもしろい、楽しいだけの学習意欲を育てるのではなく、学習に向かう姿勢をきちんとつけたい。人とのやりとりを必然的に仕組むことで、多くの発言を期待し個別の課題（生活に必要なかず・ことば）に迫りたい。言葉や計算そのものを理解することより、子どもの生活に結びついた具体的な場面での活動を探っている。そのために、繰り返しカルタや双六を活動の手がかりにして気持ちの流れを大事にしている。今琵琶湖一周の学習に子どもたちの生活に根ざした身近な頑張りを取り上げ、活動に変化をつけてきた。より具体的な場面をともなったお話を展開し、ことばやかずの基本につながる学習内容を組み立てていきたい。決してスキルだけの活動にならないようにして、心が動いて自分の頭をくぐる学習を積み重ねさせたい。

(2) 身につけさせたい言語の力に関する子どもの実態

- ・みのり2組の4年生は3名は、知的障害で発達的には5～6歳半頃で自閉傾向をもっている。
- ・通級児童1名は、軽度知的障害と二次的な情緒不安定さが見られる。

① A 児（4年男子）は、動作性より言語性アセスメントが優位である。朝の会では、挨拶や健康観察のやりとりなどクラスのお手本的な存在である。また、発言には積極的に自主的に発表することが多い。よく目にするひらがな・カタカナ・漢字は読めるが、濁音や拗音の読みはやや不正確である。作文においては、文字のぬけることが多く声に出しながら表記するように指導している。具体的な体験を通していない言葉は意味理解のできていないまま使っていることがある。聴覚情報の収集は、集中は苦手と特に数字に関して課題が多い。具体的な場面の提示を増やし注意記憶を高めるようにしている。

② B 児（4年男子）は、日常生活場面で指示されたことを理解し行動に移すことができる。しかし、受け身で周りからの代弁を待っていることが多い。体験したことは、時間軸を手がかりに話せるようになってきている。嫌な気持ちや悲しい気持ちの時以外は、言葉で思いを伝えることが少なく、我慢していることが多い。みのり2組の5人では、のびのびとした言動が増えて来ている。国語科全体に対して、苦手意識が高く作文は、書きはじめまでに多くの支援がいる。学習したことや断片的な情報をまとめることに支援が必要である。モデルがあることで気持ちの安定がはかれるようである。

③ C 児（4年男子）は、幼児期に失語症、3歳半で自閉症という診断を受けている。言語性と動作性のアセスメントに大きな差があり、得意なことと苦手なことがはっきりしている。一人遊びで自由に過ごし自分の意思をはっきり持っているが、質問されることに対して、不安感をもっている。一人遊びの中での内言語は多く、吹き出しにして書くこともできる。その自由な遊びを止められると自分の思いに気づき、怒る等して思いを表出することがある。気持ちの揺さぶりが無いと、ほとんど自分の気持ちに気づかないようである。一人遊びをしたり物を選んだりできるが、まだまだ感覚レベルだった

り、周りの雰囲気を選んでいたりしているように感じられる。

④ D 児（4年男子）は、大きな集団の中で話を聴いたり、自分の思いを伝えるたりすることに支援がある。感情の揺れが大きく、思いの伝わりにくさからの苛立ちを、反社会的な言動で表現する傾向にある。思いを伝えるための小さなステップや方法を知らせていく前に、楽しい学習で共感する経験を重ねて気持ちの安定をはかりたい。仲の良い友だちとのつながりで気持ちの安定をはかろうとしたり、注目行動をして教師の関心やかかわりを求めたりしている。文字の表記は丁寧にできるが、漢字への苦手意識があり学習から逃げようとする。

◎4名の共通の課題として、聞いて理解すること、自分の思いをしっかりと伝えられることである。特に要求することが少なく、ほとんど相手や周りに合わせてしまうことがある。要求することがあっても伝える方法が幼く、ともすれば分かってもらえないことが多い。そのため、思いが相手に伝わらず悲しい思いをしたり我慢したりしている。時には、自分の思いを伝えようと一方的だったり強引だったりする。また、書くことへの抵抗が強い傾向も共通している。

3. 題材の特質と指導の工夫

具体的な活動を通して学習することが求められる生活単元学習では、個別の課題に迫るだけでなく、人とのやりとりを楽しみ、思いが伝わりうれしいと思える経験を継続的に段階的に重ねさせたい。児童にとって、活動に向かう意欲を育てることや、自分の思いに気づいたり膨らませたりすることが、自立活動の観点からもとても重要だと考えている。児童自身が学習活動を組み立てたり、選択したりすることを多く取り入れる進め方をしようと考えた。

そのために、教材は、4人が共通の興味関心が持てることや、実際の4年生の生活に結びついている活動内容として「琵琶湖一周」を設定した。次に具体的な活動内容として、児童の共同の活動が仕組めることやその活動において切磋琢磨できること、また、継続可能、さらには、拡がりがあることを基本に活動計画を立てた。

地図作りから児童と共に始め、駅名カルタ、双六、名所や名産品と拡げていった。児童の実態や課題に合わせながら、できる限り、児童の意見を取り上げるように進めてきた。その中で個々の課題に合った出番の設定をし、自信や活動への期待感を育てるようにしてきた。日々成長する児童に、追いつけるように支援の工夫を探り、共に喜ぶことに感謝している。

本時では、受け身の活動になりやすい児童にこれまで継続してきたゲームを積極的に取り入れることで、子どもたちが主体的に活動できるようにさせたい。また、よく似た活動内容を踏襲することで、安心し自信を持って取り組みながらも、「おや？」という揺さぶりも仕組みたい。揺さぶりから生じる思いを自然に出せる雰囲気を大事にすることで、児童間の衝突も生まれるであろう。しかし、それこそが生きた大切な教材であり、偶然であっても学ぶチャンスとして逃さず共に活動し、支援したい。

本時の活動の一つ一つにおいても、自立活動としての観点を持ちつつ、さらに、「チャレンジ」というネーミングで自立活動そのものも設定している。本来は系統的に進めるべきものであるが、日々の中で身に付けさせたと考えている内容を直接活動に仕組んだものである。

「琵琶湖一周双六」については、児童の主体性を伸ばす教材として継続している。また、少ない人数ではあるが、社会性を育むことにも欠かせないものである。今後もルール改正などしながら、児童同士の話し合いを中心に学ばせたいと考えている。子どもたちがあまり緊張しないで、自然体で楽しめる活動として、内容はシンプルで分かりやすいものにし、同じ流れを繰り返すことで、安心できて見通しが持ちやすくと考えている。また、新しく今週から一緒に学ぶ D 児の気持ちの安定に配慮し、周りの児童のかかわり方や気持ちの揺れも十分受け止め、一緒に悩んだり、おもしろがったりすることで、それぞれの課題を乗り越えていく支えになり、成長を促していきたいと考える。

D 児へのアプローチ

- ・新しい環境や活動に向かわせるために、自分のペースが保障されるようにすること。
- ・自発的な気持ちの高揚を促していけるように、じっくり待つようにする。
- ・安心できる場になるように揺れる気持ちを受け止める。

【質の高い言語活動を通して】

- ①ゲーム性やストーリー性を取り入れ、安心できる集団保障を支援する中で膨らませる思い（単なる競争意識）→お互いを理解し合おうとする言語活動につなげていく。
- ②他者の言動を模倣し、パターン化することで意味・意図理解を支える。継続することで安心・自信等を生み、自己肯定感を高めることから自発的な表現を引き出す。
- ③視覚支援や具体的な言動を多く積み重ねることで言葉の意味やつながりを感覚的にとらえ、実生活の中で使っていけるようにする。
- ④活動への期待感（憧れ）から成就感の体験を言葉に代えることで、表現への意欲を高める。思いにつなげて
- ⑤教師からありのままの自分を受け止めてもらい認められる経験から、友だちからの賞賛の値打ちが感じ取れたり、自らも他者への賞賛ができるようにする。
- ⑥言葉の獲得の発達の筋道と個々の課題を確認しながら支援していく。

【学校図書館機能を生かして】

○活動内容の手がかりとして

- 『琵琶湖検定 宝物の再発見』サンライズ出版 びわ湖検定実行委員会
- 『滋賀県の歴史』サンライズ出版 滋賀県中学校教育研究会社会科部会編
- 『ぎんなみおどる』朔北社 今関信子作
- 『琵琶湖の水鳥』偕成社 今森洋輔作

○資料活用能力の入り口に表や地図を読み取る

- 滋賀県地図
- JR 運賃表

4. 評価規準

活動への関心・意欲・態度	能力	知識・理解・技能
<ul style="list-style-type: none"> ・自分でできることに自信を持ち、さらに挑戦しようとする。 ・友だちの様子を感じ取り、気持ちに寄り添おうとする。 ・話し合いに参加し、みんなで決めたルールを守ろうとする。 ・お互いの成果を発表し、賞賛できる。 ・活動をおもしろがって、最後まで明るい気持ちで力いっぱい取り組もうとする。 ・活動の様子に関心をもち、期待や願いを持つことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分で問題を解決する力を高める。 ・見通す力を高める。 ・生活に必要な数を操作したり計算したりする力を身に付ける。 ・ルールを考えたり、双六を作ったりして創造する力を伸ばす。 ・視覚支援や手がかりから、イメージする力を伸ばす。 	<ul style="list-style-type: none"> ・駅名やカルタの表記を読んだり活用したりできる。 ・場面を理解し、求められるもの（意図理解）が分かる。 ・計算方法を考え、発表できる。 ・双六を見て、必要なかず・ことばを読み取ることができる。 ・活動にかかわる言葉の理解を高める。 ・具体的な計算方法をノートに表すことができる。

5. 単元計画(全116時間)

【単元目標】

- 先生や友だちと楽しみながら活動し、学習に向かう姿勢やルールを身に付ける。
- 双六・カルタ・絵本等に親しみ、自分の思いに気づいたり膨らませたりして興味関心を広げ、思いの伝え方や方法を身に付け、素直に表現する。
- 生活に必要な数や言葉の基礎的な概念や技能を身に付ける。
- 旅の計画を楽しく立てることで、夢や希望を持つことの素晴らしさを感じる。

次	時間	指導内容	主な学習活動
一	27	第一次 滋賀県の鉄道や駅名を覚えよう！ ○駅まではいくら？	<ul style="list-style-type: none"> ・滋賀県地図をかいて形をとらえよう。 ・琵琶湖の色を塗ろう。 ・琵琶湖について知る。 ・滋賀県の JR の駅名を貼って、みんなで双六をつくろう。 ・地図や値段表を探して切符代はいくらか調べて、お金をはらおう。 ・双六をして駅名を覚えよう。 <p>学校で学んだ内容を家庭でプリントでする。</p>
二	48	カルタや双六をみんなで楽しもう！ ○人数分はいくら？	<ul style="list-style-type: none"> ・駅名カルタで漢字の読みを覚えよう。 ・カルタの枚数を確認し数をくらべよう。 ・双六やカルタのルールを考えよう。 ・人数分の切符代を計算しよう。(九九を使おう) ・「往復」の意味を理解し計算しよう。 ・切符代とおつりをお金で表したり、計算したりしよう。 ・頭の中での計算を発表しよう。
三	7 / 30	ストーリーを感じて遊ぼう！お土産はいくら？	<ul style="list-style-type: none"> ・4年生の校外学習「琵琶湖一周」を振り返ろう。 ・双六やカルタでストーリーを楽しんでゲームをしよう。 ・沖島の生活について「ぎんのなみおどる」の本を読み聞かせしてもらい、琵琶湖へのイメージを膨らませる。 ・お土産を買う場面をイメージしながら計算しよう。おつりも考えよう。
四	11	僕だけの特別な電車の旅を	<ul style="list-style-type: none"> ・自分のしたいことを考えて行き先を決めよう ・行き先について詳しく調べよう。 ・切符代や活動に必要な経費や名産品などの値段を調べよう ・旅の行程を表そう。 ・費用の概算を表そう。 ・特別な旅の発表会をしよう

6. 本時の目標

- お互いの様子を見ながら、ルールを守って一緒に活動を楽しむことができる。
- お互いの様子を見ながら、自分の思いや考えをきちんと伝えることができる。
- 場面の理解をし、場に合った問題解決ができる。

7. 本時の個人目標

- A 児（4年男子）・活動を意識して、声や動作で十分楽しみ、積極的に取り組める。
- ・大きな声で挨拶したり、数えたりして、言葉のイメージを膨らませる。
 - ・友だちをモデルに計算ができる。
- B 児（4年男子）・ルールを守って、一緒に活動を楽しむことができる。
- ・友だちの様子に合わせて言葉かけができる。
 - ・場面を理解し、意欲的に計算したり、発表したりできる。
- C 児（4年男子）・活動の流れを感じて、活動に期待を膨らませて活動できる。
- ・素直な気持ちでつぶやいたり、発表のパターンにそって発表できる。
 - ・問題を最後まで集中して聞いて、自分の力いっぱい考える。
- D 児（4年男子）・活動の流れを感じて、友だちや先生の動きに合わせてようとする。
- ・気持ちの揺れに折り合いをつけながら、活動に関心が持てる。
 - ・自分の言動について振り返り、より良い自分の姿を想像できる。

8. 本時の展開

学習活動	指導のポイント (教師の支援・予想される児童の反応)	評価、評価方法
1, はじめのあいさつをする。	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちの様子に留意して始まりのタイミングを考える。気持ちが切り換えられるように一度着席してから始める。 ・お互いの存在が意識できるように名前カードを貼らせ、友だちの様子にも注目させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・気持ちの切り替えができてきているか。(挨拶の様子から) ・友だちを見ているか。
2, 活動の流れを知る。	<ul style="list-style-type: none"> ・気持ちが安定して取り組めるように、時間をかけて楽しい雰囲気ですすめる。 ・間の取り方に注意し、ゆっくり文字を書いて、目で見た文字と耳で聞く言葉がつながるようさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・黒板に注目できてきているか。 ・期待や希望のつぶやきがあるか。
3, チャレンジしよう (自立活動)	<ul style="list-style-type: none"> ・手遊びを楽しみながら、リラックスさせ身体の一部と名称の一致を体感させる。 ・指の動き意識させるようにゆっくり進め、繰り返すこと自分でできるように慣れさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・注目し続けているか。 ・集中して取り組んでいるか。
4, 駅名カルタをしよう。 ・みんなでルールの確認をする。	<ul style="list-style-type: none"> ・ごちゃ混ぜカルタにすることでマンネリ化を防ぎ、聴くことへの集中度を高めさせる。 ・それぞれの出番を設定するだけでなく、友だちの様子に気持ちを向けさせるように支援する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ヒントになる言葉を聞こうとしているか。

<p>5, お土産はいくら？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・復習する ・お土産を選ぶ。 ・計算方法を考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の出番が分かるように座る位置や視線を合わせることを丁寧にし、気持ちが向かっているか確認する。 ・復習することで気持ちの安定をはかる。 ・全員の声そろったときに、画面が変わるようにして集中させたい。 ・品物名と値段を丁寧に確認する。 ・自分の考えを発表できるように支援する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分から発表しているか？ ・自分なりのことばで説明しようとしているか？
<p>6, 琵琶湖一周双六をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・みんなでルールの確認をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ルールでのやりとりを大切に児童同士で話し合えるようにする。 ・双六でのつぶやきをひらう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ルールを考えて発表しているか？ ・ルールを守って活動できているか。
<p>7, おわりのあいさつをする</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・最後の展開でみんな仲良く遊ぶことで「よかったね」という思いを共有させたい。 ・友だちのがんばりを共感して終わる ・活動に集中することそのものを大事にして意欲を育てるよう全てを認め褒める言葉かけをする。 ・お互いに頑張ったことを認め合い、次への期待をもたせるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・また、したいと思っているか？ ・自分について振り返りの発表ができたか。

8. 考察

本単元は、みのり2組の4年生3名に合わせて通級1名の4名という小さい集団で、自立的な生活に必要なことがらを体験的、総合的に学習し、人間関係の基礎である相互理解・規律・モラルを身につけさせたいという願いで取り組んでいる。

三学期のはじめまで、3名で一連の活動の流れが定着しているところへ通級児が加わることで、集団としてのお互いの関係性を作り替えざる得ない状況が生まれた。新しく通級してきたD児を中心におき、活動内容の見直しから行った。3人の児童にとってこの状況は、実生活に起こりうる生活の変化とするならば、どのように立ち向かわせるといいのだろうか。3名の児童にとって、この



集団の変化を受け入れることは、新たな葛藤が生まれる成長の過程としてとらえることにした。また、立場が違うD児にとっても教師にとっても、この状況の変化に前向きに取り組み、人間関係の基礎を具体的に学ぶ機会にできるように考えた。まだ、この単元は続行中ではあるが、以下の観点に基づいて考察し、課題を探ってみた。

①自分の思いが伝わったことを実感するような支えを大切にできているか。

②大人だけでなく友だちとの間で自我を出せているか。

お互いのモデルになったり、なられたりできるような集団になっているか。

③周りの雰囲気を感じ取りつつ、自分の居場所（出番）があり、活動に意欲的に取り組んでいるか。

受け入れについては、D児の児童理解について、3名の児童の個人差に考慮し丁寧なかかわりで支えることやD児本人の願いを知ることを大切にしたい。大きな集団とみのりの小さな集団の違いを感じながら行き来することに大きな不安感を持つD児の気持ちを丸ごと受け止めた。一方D児の参加で生まれた3名の児童の不安感にも共感するようにした。D児の緊張や不安は予想を超えるものであった。負けそうな場面や計算をしなければいけない場面では、身体が勝手に動いてしまうようだった。また、その場から逃れて席を離れることも多くあった。

このような児童の心の揺れを成長に結びつけるために、二つの眼鏡が必要だと感じた。活動中に起



こる様々な心の揺れを見逃すことなく適切な支援をすることは、難しいことである。しかし、教師は深く中に入り込みながら、また、一方では外から客観的に見守る「遠近両用眼鏡」の支援を心がけた。また、その支援は、学習中にとどまらずビフォーアフターにも重要である。二つの眼鏡を生活全体で使い「児童それぞれの願いや思いを知る」そして「それぞれの児童の願いや思いが伝わっているかを知る」ように努めた。

その結果、それぞれの児童に変化が見えてきた。はじめの一週間は、全員が不安いっぱいのにぎりぎり状態で泣いたり、怒ったり、集中できなかったり、暴力的だったり、怯えたりとそれぞれの表し方は4

人4様であった。その中で一番困っていたのはD児であった。

D児の気持ちに寄り添うこと同時に3人のSOSにも対応しなければいけない。指導者でなく仲間になって一緒に考えた。その中で自分たちで折り合いをつける話し合い活動もできるよう丁寧な個別の言葉かけを行った。気持ちがぎりぎりの時は、表現も分かりにくく言語活動の指導のチャンスである。しかし、それぞれの児童のぎりぎり気持ちを受け止めることが優先であった。継続的に共感し、気持ちの解放をするための方法を一緒に考え、アドバイスをを行った。不安感が強く新しい環境に一番困っていたD児の気持ちを受け止めることや、その気持ちを代弁することを丁寧にし、3人の中での居場所の無さが目の前の言動につながっていることを繰り返し説明した。みんなの願いとD児の願いは同じであることに気づけるようにした。不適切なかかわりをとがめず、奥深くその気持ちに迫るようにした。そのことで、D児の緊張や不安が少し和らいだ。

その一方で本来の力を出し切れずストレスをため込んでいた3人の児童には、今まで以上に自己肯定感を高めるように、毎日毎時間褒めることを忘れないようにした。また、休み時間には体を動かして楽しく遊ぶことで気持ちを解放するようにした。さらに、家庭との連携を密にし、揺れ動く児童の支えを家庭でもしてもらおうようにした。その成果で日に日に逞しくなっていく様子が見られた。自力で解決することの値打ちに気づき初めている。

一ヶ月が過ぎる頃から、D児の行動が落ち着きだした。きっかけは、自分の得意な折り紙をチャレンジに取り入れてもらったことである。D児の気持ちをどこまで受け入れるか他の児童とのバランスを考えることが難しかった。

次に駅名カルタでは、積み上げの差が大きく自信がないため、ルール無視など勝つために不適切な言動を繰り返していたD児の気持ちが理解できたため、同じスタートラインに立たせることにした。事実、スタートが同時の十二支カルタは自信をもって取り組んでいた。この様子から同じスタートに立つことがどの児童にも大切なことだと考える。このことから、駅名カルタの代わりに江戸前寿司カルタに変え取り組むことにした。このカルタで自己肯定感の高まったD児に、さらに変化が見えてきた。不適切な関わりがほとんど見られなくなったのである。また、その変化に伴って他の児童も彼の存在を受け入れまた、友だちとしてのかかわりもできてきた。少しずつではあるが、心の絆ができてつつあり、相互の人間関係をつくりあげている。集団としての成長と個々の成長との両方が相乗的に成長し始めた。そのことは児童の意欲につながり、1ヶ月を経て自分から宿題を取りに来るようになってきた。ばんざい！児童の成長は教師の意欲につながりまた、児童にかえっていく。途切れない支援の継続が児童も教師も前向きに生きることに繋がっていくことを確信した。本当の居場所について今後も探りたい。また、「子どもは子どもの世界で育つ」ことを自立活動の観点から検証していきたい。

